

日向国延岡藩内藤充真院の大坂寺社参詣

神 崎 直 美

はじめに

本稿は、日向国延岡藩主内藤政順の夫人であった充真院の寺社参詣について検討するものである。充真院は晩年期に江戸と延岡の間を旅した際に、多数の寺社に立ち寄り参拝した¹⁾。その中から本稿で対象とする寺社は、充真院が旅の半ばでしばらく内藤家の大坂屋敷に滞在した折に訪れた寺社である。この屋敷は蔵屋敷である(以下、大坂屋敷と記す)。

大坂の寺社を参詣したことについて、充真院は旅日記

(紀行文)である「五十三次ねむりの合の手」と「海陸返り咲ことはの手拍子」に見聞の様子をしたため、かつ挿絵も描いている。挿絵を描いているということは、その対象にひとしお深い関心を寄せている反映であり、かつ読み手として想定している身近な人々にとりわけ伝えたいからでもある。

本稿では、充真院の人物像を明らかにする研究の一端として、これらの寺社参詣の様子を検討する次第である。訪問先はいずれも当時、大坂の名所として著名な寺社である。参詣の様子を旅日記から再現しながら、どのような行程だったのか、境内のどこに立ち寄ったのか、どの

ように参拝したのか、特に関心を持った事物は何か、ということなどを明らかにして、充真院の寺社参詣の実態を見つめてみたい。同時にこの検討が、当時の大名家の女性の寺社参詣とは如何なるものであったのかということを示す一助になればと思う。

- (1) 充真院が初めての旅で立寄った数々の寺社名については、拙稿「日向国延岡藩内藤充真院の旅日記から見る関心と人物像——「五十三次ねむりの合の手」を素材として——(2・完)」(『城西大学経済経営紀要』第三一卷、平成二十五年)の五一〜四頁でごく簡単に紹介した。なお、以下で右の論文を注記する際に拙稿「関心と人物像(2)」と略記する。

一 大坂屋敷と屋敷内の御宮

充真院が大坂の地、および内藤家の大坂屋敷に初めて足を踏み入れたのは、文久三年(一八六三)の人生初の大旅行の途中であった。当時、充真院は六十四歳である。

内藤家の大坂屋敷は堂島新地五丁目(現在の福島区福

島一丁目)にある。当時、この屋敷地は南を堂島川、北を蜷川に挟まれた地の西側にあった。西側のうち、堂島川の玉江橋と田蓑橋の間、蜷川の浄正橋と梅田橋の間に八家の大名の蔵屋敷があり、その西から三区画目であった。内藤家の隣は東が久留米藩、西は中津藩の屋敷であった。文久三年に刊行された「改正増補国宝大阪全図」から当該部分を図1として示しておく。^①

大坂屋敷の敷地は南北に細長く、面積はさほど広いが、門前まで小船を着けることができ、蔵屋敷ならではの利便さがある。しかし、充真院らが東海道を経て大坂屋敷に向かう折には、伏見から淀川水系を船で下り、八軒家で下船して、そこから駕籠に乗り大坂の町中を通行して大坂屋敷入りした。

川に挟まれた両側には道もあるので、通行人の目が気になることもあった。ちなみにその様子は、「屋敷廻りしうら門より外をのそきかへりしと門のくゝりのしるらぬ間、直に通りの人こたくと来て見と云くらひの物見高さ」とあるように、充真院が屋敷の裏門から外の様子を見ようと行むと、すぐに通行人が充真院を眺めに集まっ

南



図1 文久3年「改正増補国宝大阪全図」より

てきた。⁽²⁾ 武家の屋敷地であっても、物見高くぶしつけな大坂人の視線があるので、気を抜くことができない。武士が多い江戸では庶民が武士に対する心得をわかまえていたのでこのような事は珍しく、大坂人気質に辟易したのである。

充真院は大坂屋敷に文久三年（一八六三）四月二十四日に到着し、五月五日に屋敷を出発して延岡に向かう当家の船に一晚、船中泊してから六日に大坂を離れている。すなわち、大坂に旅の十九日目から三十日目まで十二日間も逗留し、そのうち大坂屋敷に十泊したのである。全五十五日間の旅のうち、二割は大坂屋敷で過ごしていたのである。大坂屋敷は江戸と延岡の中間地点であり、主たる旅の方法が陸路から海路へと切り替える地点が大坂である。大坂屋敷は当時六十四歳の高齢であった充真院の長旅の疲れを癒す為の休憩所となったのである。充真院は大坂屋敷で土産品を整えたり、寺社参詣に出かけるなど、寛いだ時間を過ごした。

大坂屋敷については、充真院が敷地内の建造物の配置を「五十三次ねむりの合の手」に略図（図2の下部）で

はあるが挿絵とした^③。この図から大坂屋敷の様子を具体的に知ることができる。玄関は役所の側にあり、小さい部屋が四間、広い座敷が一間、風呂場と廁らしい部屋がある。広い座敷は庭に面しており、庭の両側には石灯籠が多数設置されていた。充真院は道中でも休憩した座敷の間取り図を度々描いており、間取りに関心があることが窺がえた。そして初めて足を踏み入れた大坂屋敷でも間取り図を描いたのである。図について、充真院は「先かやうにあらまし見ゆ」と言葉添えを添えている^④。したがって、この図は大坂屋敷に到着した直後に充真院が認識し



図2 大坂屋敷

た屋敷内の配置であることがわかる。

大坂屋敷の敷地には、江戸屋敷よりも立派な屋敷神を祀る御宮が設けてあった。充真院は四月二十七日に御宮を見る機会を得た。同じ敷地内ではあるが、到着後にすぐさま参拝する時間がなく、ようやく大坂屋敷に到着してから三日後の二十七日の夕方に御宮を初めて見る事ができた。この二十七日の様子は、「いまた稻荷様・生目様・八天狗様江参り不申、別段に参けいと思へとも間合なくいかす居候ま、夕くれに成候へとも只々御宮廻りのやうたいを見に行し也」とある^⑤。

もっともこの時は正式に参拝するのではなく、御宮の廻りの様子を簡単に見ただけであったが、初めて目にした時の感想として、「誠に〜御りつは成御宮之か、り」と感激を込めて表現している^⑥。正式に参拝したのは五月一日である。その折の御宮に対する感想は、「作さまは随分江戸の神様と申てもはつかしくもなきやうにて、よき方によりて有とも^⑦」と、大坂屋敷の御宮の様子は江戸の神様であると言ってもひげをとらず良い造りであると記しており、初見の感想と比べると抑え気味の口調であ

る。充真院の江戸びいき、および江戸の在り様を基準として考えたり感じたりする傾向が反映した感想であり、その点を留意すると立派な御宮であったと受け取るべきであろう。

なお、同日の感想として充真院は「とふか江戸の屋敷神々様も、是程にはおよびも無なれとも、少しはよふ致思度事と思ひつゝけ」と、江戸屋敷の御宮は内藤家の大坂屋敷の御宮の立派さには及ばないが、それでも少しは良く思いたいと思いつづけていると、江戸びいきな心地を再び表しながらも、御宮の立派さを褒めている。さらに「大坂にても屋敷の神々様のうちにては一と申事に候」と、内藤家の大坂屋敷の御宮は大坂の屋敷神を御祀りする御宮として一番すばらしいと、自画自賛している。

御宮には「屋敷なる稲荷様・生目様・八天句様、御同社にて有りしに」と、稲荷とおんめ様(産女霊神)と八天狗を一つの御堂に一緒に祀っていた。充真院はこの御宮の配置図も略図(図2の上部)として描いた。描いた日は初見の四月二十七日である。配置図によると、御宮の入り口・拝殿の向い・出口にそれぞれ一つずつ、都合

三つの鳥居があり、御手水の井戸とその前には石製の手水鉢が設置してある。拝殿は階段を二段上がった所であり、拝殿の斜め向いに額堂が別棟として建ててあった。

額堂に奉納されている額も、実に立派であった。「額堂杯にもりつは成大きやう成かく多有て」とあるように、額堂にりっぱな大きな額が沢山奉納されていたという。

充真院が配置図に省略して描かなかつたものは多数の石灯笼である。「石とうろうも多有て」と、石灯笼が沢山あったという。おそらく、石灯笼は拝殿に向かう鳥居の間の参道の両側に配置していたのであろう。右の様に、大坂屋敷の屋敷内の略図と御宮の配置図を描いたのは、充真院にとって初めて滞在することとなった大坂屋敷が、物珍しくて興味をそられたからに他ならない。

立派な内藤家の御宮は、内藤家および家中に加えて、近隣の人々の信仰の場にもなっていた。しかも、昼夜を問わず頻繁に参拝者が到来していた。その様子は「朝夕夜迄も参詣の人の参るやう子聞へ申候」と、朝から晩まで参拝者の気配が聞こえると充真院が記録している。外部からの参拝者が増えたのは、「外よりも此六・七年は

多候へとも」と、六・七年前からという。⁽¹⁶⁾「今は門むつかしく成候故、参詣は諦なから、朝ことにはわに口の音哉、人の足音聞へ申候」と、現在は以前のようには容易に門を通ることを許可しないが、それでも朝には御宮の鰐口を鳴らす音や参拝する人の足音が聞こえた。⁽¹⁷⁾大坂で内藤家は近隣住民に祈りの場を、以前より制限しながらも提供していたのである。屋敷内の御宮は近隣の人々から信仰を寄せられ、親しまれていたためである。

(1) 本稿で図1として掲載した「改正増補国宝大阪全区」は、玉置豊次郎著『大阪建設史夜話・大阪古地図集成』（大阪都市協会発行、昭和五十五年）の附図（複製地図）の第十五図である。なお、内藤家の大坂屋敷はかつては別の位置にあった。文化三年（一八〇六）に刊行された「増脩改正摂州大阪地図全（西半）」（右附図、第十一図）には文久三年と同位置に描かれているが、寛延改正（一七四九年頃）「摂州大坂画図」（右附図、第七図）や、宝暦九年（一七五九）刊行の「摂州大坂画図」（古地図史料出版株式会社複製）には、中之島の西側に堂嶋川沿いの小倉屋仁兵衛丁に位置していた。この場所は現在の中之島五丁目で、文久三年には津山藩の屋敷である。なお、以下の本稿で古地図を参照したと記した場合、この

文久三年の古地図のことである。

(2) 「五十三次ねむりの合の手」は明治大学博物館編『内藤家文書増補・追加目録8 延岡藩主夫人内藤充真院繁子道中日記』に収載されている。引用部分は四九頁である。以下、本稿では右書から引用した際には明大翻刻本と略記する。引用にあたり、理解し易いように便宜的に読点を施したり、原本を確認して翻刻の表記を改めた箇所がある。なお、ここで説明した大坂人気質については拙稿「関心と人物像(2)」の三頁でふれた。

(3) 屋敷の挿絵は明大翻刻本の四〇頁の下半分に掲載されている。なお、以下の本稿に掲載した挿絵は原本から撮影したものである。

(4) 明大翻刻本、四〇頁。

(5) 明大翻刻本、三九頁。

(6) 同右。

(7) 明大翻刻本、四九頁。

(8) 充真院の判断基準が生まれ育った江戸の有り方であることは、拙稿「関心と人物像(2)」三三頁、四一頁、五五頁などでもふれた。

(9) 明大翻刻本、四九頁。

(10) 同右。

(11) 同右。

(12) 御宮の挿絵は明大翻刻本の四〇頁の上半分に掲載されている。

(13) 明大翻刻本、四九頁。

(14) 同右。

- (15) 明大翻刻本、三九頁。
 (16) 明大翻刻本、四九頁。
 (17) 同右。

二 高津宮と安居天神

充真院が大坂に滞在した十日間のうち、寺社参詣の為に外出したのは二日間で、滞在五日目の四月二十八日と九日目の五月三日である。この二日間のうち、四月二十八日は早朝から出かけて一日かけて遠方まで赴いた参詣で、訪れた寺社の数も多く旅日記に文章と挿絵を豊かに描いている。

四月二十八日は、大坂屋敷から南に位置する高津宮・安居天神・新清水寺・一心寺・四天王寺・住吉大社など、六ヶ所の寺社を参詣した。⁽¹⁾この日は一心寺に隣接する茶臼山古戦場跡も眺めた。五月三日は大坂屋敷から東に位置する本願寺と天満天神(現、大阪天満宮)を参詣した。五月三日は早めに昼食を摂ってから出かけており、訪れた神社は二ヶ所と少なく、むしろ茶屋町の様子を見聞す

ることが目的であった。神社参詣の記述は極めて簡略であり、神社に関する挿絵も無い。

そこで本稿では四月二十八日の寺社参詣を主たる検討の対象としたい。なお、この折の同行者の総数は不明である。具体的に名前が確認できるのは、孫娘の光と奥付の女性で最高位の老女と思われる砂野、奥付であるが具体的な地位が不明の初、御里附重役の大泉市右衛門明影の四名である。⁽²⁾この他に若干名の身近な者と、駕籠や荷物を運ぶ下働きの者などを従えて出かけたのであろう。

四月二十八日に訪れた寺社名は前述したが、高津宮・安居天神・新清水寺・一心寺・四天王寺・住吉大社の順に参詣した。これらの寺社のうち内藤家の屋敷から最も遠い住吉大社は、直線距離ではおよそ九km、後述するような水路と陸路を経るとおよそ一二kmである。住吉大社が屋敷から遠方に位置すると意識されている様子は、前日・二十七日に屋敷に招いた義太夫の名人の実演が期待していた程には良くなかったので、下からせる理由として「明日は住吉参詣取込ゆへと申かへしぬ」と述べた様子から窺がえる。⁽³⁾

当日は幸い天気も晴れ、参詣に最適であった。丸一日をかけて十分に参詣する予定であり、「朝早ふおき出仕度して、六ツ半時供揃にて大坂屋敷を五ツ比に立出」と、早朝に起床して出かける用意をして、午前七時頃に同行者が集まり、八時頃に屋敷を出発した。

経路は水路と陸路を行くので、船と駕籠を利用した。まず、大坂屋敷の門前から紅梅舟という船に乗った。紅梅舟は長さが四・五間——およそ七・九m——で、船の両側に細い縁が付いている。さらに、障子を両側に立て、畳を三畳ほど敷いてあった。充真院はこの船について、「江戸の舟より手薄く、何かこほけし船の様に思はれ」と、江戸の船のように頑丈ではなく壊れてしまいそうである、その仕様を江戸の船と比較しながら感想を述べた。充真院は大坂の船を心細く思ったようである。なお、江戸の様子を判断基準として評価する充真院の特徴がここでも表れている。

船で進んだ川の名前を充真院は具体的に記していない。「此川の上手の方へこき行」とあるので船は門前から上流に向かったのである。さらに進むと進路は「右へ入、

左りへ入て」と左右に曲がり、船から上陸した場所は「日本橋の橋つめ」であった。これらの手がかりを基にしながら古地図を参照すると、具体的な経路は次のようである。

門前から堂島川を右（南）に中之島を見ながら上流（東）へ進み、難波橋の下を通過して、その少し先の葭屋橋をくぐりながら右（東）に曲がり東横堀に入る。しばらく南に進むと南本丁一丁目を過ぎた本町曲がりで掘割が少し左（東）に撓むが続けて直進（南）すると、右（西）に直角に曲がり道頓堀に入る。そのすぐ先が日本橋の橋詰め、ここから上陸したのである。日本橋からは充真院を駕籠に乗せ、東に位置する高津宮を目指したのである。

船で川を進む際に「橋多き所とて、右にも左にもいくつも橋有て」と、大坂の名物である多数の橋を目にし、さらに橋の下を何度も通過した。水の都ならではの体験である。しかしながら「あまり多ければ覚へず」と、充真院は橋の名前を聞いたものの、その数があまりにも沢山だったので名前を覚えきれなかった。充真院が船でく



図3 高津宮の西側の階段

ぐった橋を、古地図を参照して往路での順に示しておきたい。堂島川は田蓑橋・渡辺橋・大江橋・難波橋、東横堀は葭屋橋・今橋・高麗橋・平野橋・思案橋・本町橋・農人橋・九宝寺・安堂橋・末吉橋・九之助橋・瓦屋橋・上大和橋、道頓堀は下大和橋・日本橋で、都合十九である。

一番初めに参詣したのは高津宮である。高津宮は古代において浪速に都を開いた仁徳天皇を主神とする由緒ある神社である。上陸した日本橋の橋詰から、高津宮は東におよそ一二五mの位置にある。

充真院は高津宮に到着すると、駕籠から降りて境内を徒歩でめぐった。まず、充真院の当地での経路を示して

おこう。充真院は「山に石段を作りかけて、此様に幾もきり／＼上る」と記しており、まず、

斜面に築いた階段を昇った。^⑥この階段を充真院は略図(図3)として描いている。三段に折り返した階段である。当時、このような形状の階段が高津宮の敷地の西側に存在していた。日本橋の橋詰から高津宮に向かうと、最短の場所がこの西側の階段なのである。なお、当時、この階段は三下り半の石段と言われ、階段がある坂を縁切り坂と称したという。^⑦つまり、当時「西坂の門」^⑧と呼ばれていた門をくぐり、階段を登って境内に入場したのである。

高津宮で充真院が興味を示したものは、前述した三つ折の階段の他に、御製・本殿・茶店・茶店から眺めた御製に詠み込まれた景観である。

充真院にとって高津宮は、たしなみの一つである和歌と所縁の地である。「此高津の宮と申奉るは歌にも有、高きやに登りてみればの御詠被遊候天子様を祭りし宮」と、当時、仁徳天皇御製(実は藤原時平の作)と言われていた短歌に思いをはせている。文字に造詣の深い充真院らしく、高津宮の説明として第一に御製についてふれたのである。^⑨

高津宮の本殿は、「宮作りは江戸と違ひて古代めかしく」と、江戸で見慣れている神社の建物の様子とは異なり古風な雰囲気であると感じている。建造物を見る折にも、江戸の仕様を基準にしており、またここにも江戸で生まれ育った充真院の価値感が表れている。充真院は、「先ふし拜み、暑きにて石段にていき、れ候まゝ、上江は上らて下にてふし拜み」と本殿を目にしてすぐさまその場で伏し拜んだが、暑さのために既に先の階段で息が切れていた^⑩ので、本殿に入り正式参拝することはせずに、外から伏し拜むに留めた。

境内の茶屋にも立寄った。「わきに少し茶屋めきたる所有ゆへ、夫江立寄」と充真院が記した茶屋は、拜殿に向かつてすぐ左手前にあり、充真院が境内に入場した際に登った階段の右側でもある^⑪。茶屋及び、茶屋の北側は当時、大坂市中西南を望める眺望の地として有名な大坂名所の一つである。北側では遠眼鏡を設置して、遠くに淡路島や須磨・明石・武庫山などが眺められ参拝者にとつて高津宮における見所の一つであった。文人らがその景観を眺めて、俳諧や短歌、漢詩に感動を詠み込んだこと

でも知られる。

しかしながら、充真院はここからの眺めを先人らのように感激することはなかった。特技である短歌を詠じた様子も見られない。さらに仁徳天皇御製として知られていた短歌に詠まれていた景色を眺めたものの、「御歌の躰のやうに向ふ見はらしけれど、昔には似ず」と述べている。仁徳天皇が見晴らしたと伝えられる場所に立って眺めてみたが、充真院が期待して確認したく思っていた御製の描く風景——庶民の家から竈の煙がたなびいている景色——は確認できなかったのである。さらに眺めた場所について、「木立茂りて左右はよくは見はれなく」と、当時、茶店から西側を眺めると、その周囲に木立が生い茂り展望に妨げがあった^⑫。

なお、充真院が訪れた時、高津宮は参拝客で賑わっていた。充真院が茶屋で休憩していると「少し居うちに茶やの人立多て、供の者杯も、とこに居哉と思ふくらひ」と、茶屋に立寄る参拝客が増えて、充真院は御供を見失いそうな程であった。それから「其をはらひ〜」と多くの参拝客を人払いしながら境内の外に向かった。高

津宮を退出する際、「うら坂よりもとる道は、さのみ石段もなく、なたらかにてあるきよく」と、石段の数が少なくならかな到着時とは別の道を進んだ。実はこの道こそが、境内の南側に位置する表参道である。充真院一行は境内の西側から入り、南側から退出したのである。

充真院は「うら坂」と記しているが、この坂道は表門に続く表参道であり、高津宮の正面入り口である。¹³ 充真院は高津宮の西側から境内に入ったため、退出する際に通った表参道を裏側と誤認識したのである。

なお、当時の高津宮の境内では有名な湯豆腐屋が営業していた。¹⁴ 前述した茶店のさらに南側で、社内の西側に位置しているので、湯豆腐に舌鼓を打ち、さらに景色を眺めることが参拝客の楽しみであった。しかし、充真院はこの湯豆腐屋については、全くふれていない。充真院は湯豆腐屋、および湯豆腐に関心がなかったのであろうか。庶民で混雑する湯豆腐屋をわざわざ覗く気にはならなかったからであらうか。

高津宮の表門を出た充真院一行は、次の参拝地である安居天神（現在の安居神社）に向けて南に進む。高津宮

から安居天神までの距離は近く四〇〇m程である。高津宮から安居天神に続く道は、当時、参拝客で混雑していた。「見物の人に、うしろ前よりこたくと付て居ゆへ、町杯のやう子も見へねは、又かこに乘行は」と、充真院は表門を出てしばらくの間は歩いてしたが、見物の人々が前後にたくさんおり、町の様子が見えにくいので駕籠に乗ることにした。¹⁵ この界隈の当時の賑わいが窺がわれる記述である。大坂の人々は物見高く、充真院の駕籠の中まで覗きこみ「ほんさんしゃ」、すなわち坊さんだ、などと言うので、充真院は閉口しながら安居天神に到着した。

安居天神は高津宮とは対照的に「けいたいは淋しく」と、充真院が到着した折に境内は静まりかえっていた。¹⁶ しかし、建造物について充真院は「御宮は随分りつはに作、大きく余程古ひ」と、りっぱな大きな社殿で、建築してから随分年月を経ていると見定めた。安居天神は菅原道真を御祀りしており、天満宮と呼ばれていた。菅原道真が筑紫国に左遷される道中に、この地で休息——安居——された縁により、道真を祭神としたという。¹⁷ 高津

宮に比べるとこじんまりとした御宮である。学問・文芸などに心を寄せる充真院には関心がありそうな神社であるが、「又跡急きしかは、こゝも内神迄は上らすして外にてふしおかみ」と、後の参拝の予定が詰まっておりますので、拝殿にはあがらずに外から伏し拝んだ。

高津宮と安居天神の参詣は、いずれも拝殿にあがる正式参拝はせずに、外から拝むに留めた。外から拝むという簡略な参拝にしたのは、「又跡急きしかは」とあるように、この日はまだこれから参詣する予定地が四ヶ所も控えており、過密なスケジュールであったため、一・二番目に立寄った神社に時間をかける余裕が無かったのである。なお、拝殿の外から拝んでいるが、いずれも伏し拝むというように、極めて丁寧で礼を込めた拝み方である。充真院の神に対する敬虔さが窺い知れよう。

なお、安居天神は大坂夏の陣で真田幸村が戦死した地とも言われているが、その点について充真院はふれていない。譜代の立場であり徳川家から信頼が厚い内藤家の一員、かつ同じく譜代の井伊家の出身である充真院にとって、安居天神が豊臣側の武将である真田幸村の終焉の地

であることは、とりたてて注目するにはあたらないうことだったのかもしれない。

(1) 充真院が文久三年の旅で参拝した寺社については、拙稿「関心と人物像(2)」の五三頁で紹介した。

(2) この参詣の同行者で名前が確認できた者の明大翻刻本の当該頁を示しておこう。光と大泉市右衛門は三九頁、砂野は四七頁、初は四四頁と四七頁である。なおこの当時、光は十四歳であったことが、内藤政恒『内藤政舉傳』(非売品、昭和五十一年)の四五頁に嘉永三年(一八五〇)生まれと記されていることからわかる。大泉市右衛門明影については、彦根城博物館編集『彦根藩史料叢書侍中由緒帳13』(平成二十四年)の二六七頁に充真院に仕えたことが掲載されている。安政五年(一八五八)五月十二日に充真院の附人となり、文政三年三月十二日に充真院が延岡に転居するので御供するよう命じられた。その後、市右衛門は慶応四年(一八六八)二月二十三日に彦根住居を命じられるまで充真院に仕えたのである。充真院に仕えたのは、市右衛門の晩年期である。なお、市右衛門の先代である養父の市右衛門敬介も充真院の附人を勤めており、任命されたのは天保十四年(一八四三)七月二十一日である。敬介が充真院に仕えたのも晩年期である。敬介については、右同書の二六四頁による。なお、拙稿「関心と人物像(2)」で光については五〇六頁、砂野は六頁、市右衛門は八〇九頁でその立場などをふれ

ている。市右衛門の姓については、内藤記念館学芸員の増田豪氏より御教示をいただいた。

(3) 明大翻刻本、三八頁。

(4) 明大翻刻本、三九頁。以後、屋敷から船上陸するまでについての引用は、全て同頁である。

(5) 高津宮について『撰津名所図会大成』其ノ一(柳原書店、昭和五十一年)の二三八―二五三頁に記述がある。

『撰津名所図会大成』は著者曉鐘成が、秋里籬島が著述した『撰津名所図会』を越えた当地の地誌を作成したいと志し、その晩年である安政二年(一八五五)以降に著述したものとわれている。幕末の当地の名所の様子を描いており、充真院が大坂を訪れた文久三年と時期が近いので、充真院の旅日記の記述を補足しながら状況を考えるにあたり好素材である。なお、本稿で充真院が訪れた参詣地とその見聞を検討するにあたり、『撰津名所図会大成』や秋里籬島著『撰津名所図会』(版本地誌大系10、臨川書店、平成八年)などを参考にして補足しながらその足跡を再現した。

(6) 明大翻刻本、四一頁。以下、高津宮について特に注記なき場合は全て四一頁からの引用である。挿絵も同頁である。

(7) 現在(平成二十四年当時)、高津宮が作成し参拝者に配布している「浪速高津宮案内記」と「高津さんの今昔」による。この階段は現在、改修して二段の折り返しとなっている。なお、この階段に沿った西側の道は、江戸時代には店が立ち並び賑わっていたが、現在はすっかり宅地

化している。

(8) 「西坂の門」という名称については、『撰津名所図会大成』其ノ一の二四四―五頁に掲載されている社内の図・其三に明記されている。

(9) 明大翻刻本、三九頁、四一頁。高津宮所縁の仁徳天皇御製と充真院については、前掲拙稿「関心と人物像(2)」の四八―九頁でふれている。

(10) 明大翻刻本、四一頁。前掲拙稿「関心と人物像(2)」の四九頁で充真院は石段を登らずに伏し拝んだと解釈したが、現地を訪れて境内を再度確認したところ、本稿の解釈に訂正しておきたい。

(11) 茶店は『撰津名所図会大成』其ノ一、二四四頁・二四七頁に挿絵として西側と正面が描かれている。「高津さんの今昔」によると、この茶店は現在、絵馬殿になっている。

(12) 明大翻刻本、四一頁。

(13) 『撰津名所図会大成』其ノ一、二四〇頁に「表門鳥居」と記しており、この出入り口が表門なのである。

(14) 湯豆腐屋については、『撰津名所図会大成』其ノ一、二四八―九頁に挿絵が描かれている。

(15) 明大翻刻本、四一頁。以下、この界限に関する引用は同頁。

(16) 安居天神に関する充真院の記述は全て明大翻刻本の四一頁である。

(17) 安居天神については『撰津名所図会大成』其ノ一、三六―四頁に記載がある。『撰津名所図会』第一巻には境内

を俯瞰図で描いた挿絵と、社内の山での花見の様子を描いた図もあり、当時、人々に親しまれていた名所である様子が窺われる。これらの図は同書の一九二―五頁、説明文は二〇七頁にある。

三 新清水寺・一心寺とその周辺

次に充真院が訪れたのは新清水寺である^①。充真院は当寺を「清水観音」と記している。正式には有栖山新清水寺（現在は清水寺）といい、四天王寺の支院である。充真院一行は安居天神から北の方角に田畑に囲まれた道を進むと新清水寺に到着した。安居天神から新清水寺に移動したということは、経路としては北の方向に戻ったのである。高津宮の参詣を終えて南下した際に、安居天神と新清水寺の距離が五十mにも満たない近所であるため、うっかり新清水寺を通り過ぎてしまい、安居天神に先に到着してしまった可能性がある。充真院は新清水寺では、本尊の観音像と境内の賑わい、楽焼の観音像と御守御影、滝について記録している。

まず、充真院は「この観世音は京都清水を写し出来しとの事」と観音像の所縁にふれている。観音像とは当寺の本尊である十一面千手観音のことである^②。新清水寺は「参詣の男女随分有」と参拝客で賑わい、当時、多くの人々から信仰を寄せられていた様子を充真院も目の当たりにした。ここでの充真院の参拝については「拝して」と極めて簡単に記している。

新清水寺には本尊を模造した楽焼の観音像が複数陳列してあった。充真院はこの模造の観音像がたいへん気に入った。大坂屋敷に到着する以前の道中の途中で関の地の蔵尊を参拝した際に地藏像を入手したように、この楽焼の観音像を欲しく思った。そこで「いただき候事も出来候は、戴かへらんと尋しかは」と、わけてもらうことが可能であればわけてほしいと、遠慮がちに御供を通して寺側に尋ねた。「随分好に候は、戴も出来候へとも、楽にて直にかけれるが承知ならおろし出さんといへる故」と、充真院が楽焼の観音像をととも気にいったことを御供が寺側に伝えたところ、寺側はそれならば譲るが、楽焼で頑丈ではないため直に欠けるがそれでも良ければ譲

るといふ返答であった。充真院は「損しては気かゝり故、まつ其事はやめ」と、模造とはいへ貴い観音像が欠損するのは恐れ多いので、わけてもらうことは取り止めた。その代わりに御守御影を入手した。

当寺の見所である滝も見物した。この滝を充真院は清水の滝と記している。現在の玉出の滝のことである。充真院は滝について位置及び様子を詳しく記録している。境内での位置については「清水の瀧は段の左手ゆへ行てみるとす」、さらに「よこの石段をおり、左りの手に行は、はゞせまき道にて、下は飛石をわたり行は、舞台より三筋瀧落、流水の末は飛石の中をなかれ行、うへは木茂りて玉垣ちら〜と見ゆる」としたためている。本堂の横の狭い道を進み左手に清水の滝があり、滝は見上げの舞台から三筋流れ落ちてゐる。

充真院は滝を眺めるに際して、下に引き詰めてある飛び石の上を歩いてから眺めたという。滝のある敷地の入り口からも滝は十分に眺められるが、充真院は敷地の奥まで行き、滝を眺めたのである。三筋の滝の上は木がうっそうと茂っており、玉垣は少し見えるだけであったという。

この滝の様子について充真院は関心を寄せたのである。三筋の滝は近世末に作られた滝である。この滝も当寺の本尊と同様に、京都の清水寺にある滝を模しているが、そのことについて充真院はふれていない。さらに三筋の滝の下には不動妙王と両童子の像が鎮座しているが、これらの像についても記していない。

新清水寺はさほど大きな規模の寺ではないが、充真院が訪れた折、「ふり袖着てつまからけの娘大せいつれの人なそもみゆ」と、振袖を着飾った大勢の娘やその同伴者など参拝客で賑わっていた。充真院は新清水寺が気に入ったらしく、その敷地を挿絵(図4)に描いている。木々を周囲にめぐらした高台に本堂があり、その一角から滝が豊かに流れ落ち、境内を参拝客らが散策している様子である。現在には失われた往時の様子が偲ばれる貴重な挿絵である¹⁾。

新清水寺の参詣を終えて、充真院一行は裏門から退出した。ここから充真院が駕籠に乗ったことは「いねふりおほへす乍」という記載から窺がわれる。道の周囲に田畑が続くのどかな景色の中を駕籠が進むと、眠気を催し



図4 新清水寺

居眠りしそうになった。いささか疲れも出たのであろう。それでも、紫蘇などが生い茂っている様子を目にしている。

新清水寺からはさらに南にある一心寺に向かった。既

に参拝した安居天神のすぐ南に一心寺がある。充真院一行は新清水寺の裏門から退出しているので、新清水寺から一心寺までの距離は五十m程である。すぐ近くなので、充真院は居眠りを本格的にする間もなく到着したはずである。

一心寺に関して、充真院にしては珍しく具体的な寺名を記していない。尤もこの寺について「茶うす山古せんしやう跡、今は寺に成しよし」と記しており、これに相当する寺とは一心寺——坂松山一心寺高岳院——である。^⑤宗派は内藤家の菩提寺である光明寺と同様に浄土宗の寺院である。

一心寺に到着すると「ここへ来り門より駕籠におり行に」と、充真院は門で駕籠を下りて徒歩で境内に入った。この門は当時の正門のことであり、一心寺の北西に位置する。^⑥一心寺に到着した時の様子を充真院は「殊之外暑くおほへしまゝまつ、かたわらなる小なる堂の軒下に、しはらく休て向を見れば、大きな松、其枝ふり殊の外よく枝たれ、四方四面にてよき松也」と、たいへん陽気が暑かったこと、門の側にある小さな御堂の軒下で暫く

休憩しながら、四方に枝を形良く垂らした大きな松を眺めた」と記している。この向こうに見えるりっぱな枝振りの松とは、書院の庭にある駒繫松のことであろう。⁷⁾

さらに境内に歩を進めた充真院は本堂を目にする。本堂では地面に莫蔭を敷いて、「本田家のまくを張て、僧共大勢い経よみ有しかは」と、本田氏の法事を行っていた。この本田氏とは、本多出雲守忠朝のことである。本多忠朝は関ヶ原の戦いで徳川側として活躍し、その軍功により上総国大喜多に五万石の所領を宛がわれて大名となったが、後に大坂の役に出兵して茶臼山の戦いで戦死した。⁸⁾

充真院は一心寺と本多氏の所縁を知らなかった模様で、「尋し所御ゆい所有故」とここで質問して知るところとなった。実は、本多忠朝と内藤家の藩祖である内藤政長は慶長十九年(一六一四)九月に安房国の里見忠義が幕府から所領を没収された折、共に命を受けて当地に赴き、城郭の破却と当地を守護する任務を果たした。⁹⁾ 充真院は内藤家のかつての当主に思いをはせる人物であるが、政長と本多忠朝との関わりについてまでは知らなかったの

である。¹⁰⁾

充真院は本多氏、および共に戦死した家臣らの墓も目にした。「右の堂を立出て、右手の向に行は、爰にて打死なせし人々のはか有て」と充真院が記したのは、一心寺の本堂から見て東側に位置する忠朝とその配下の者たちの墓所のことである。¹¹⁾ 忠朝の墓石は巨大な五輪塔であるが、形状に関して充真院はふれていない。¹²⁾

一心寺の隣に茶臼山古戦場がある。茶臼山古戦場について、充真院は草木が茂った小高い山の姿を見て興味を寄せたものの、実際に歩くには至らなかった。「向に小高き山有て、木茂り草多はへて有ゆへ、人にうへは見はれにてもよき哉と尋しに、何もみへず、只昔の古せんしやうの跡計との事故、おそなはりもせんと、又只々見し計にて、元の所にかへりぬ」と、茶臼山の頂上は見晴らしが良いかと尋ねたが、登っても特に何も見るべき物はなく、昔の古戦場の跡であるだけとの返答なので、目にするに留めた。¹³⁾ 充真院がこのような質問をしたのは、もしも見晴らしが良ければ茶臼山に登って周囲を眺めてみたかったからであろう。

一心寺参拝を終えて、充真院一行は昼休みをするために福屋を訪れた。福屋は一心寺の側にある料理茶屋で、宴席が風流で庭先の景色が美しく人氣が高い有名店である。

充真院は福屋で休憩した時の様子を目に浮かぶように詳しく記録して、かつ挿絵も描いており、福屋は印象深い店であったことが窺がわれる。

まず、到着した充真院一行は、玄関で福屋の赤前垂れを腰に巻いた店の女房らしき人物に出迎えられた。建物の間取りに興味がある充真院は、さっそく座敷を目にして「其広き事十五畳計もあらん」と記している^⑤。座敷については、「座敷二間有りて、縁広く、其前によしにて日よけて」と、他の座敷の存在や、縁側が広いこと、縁側の前面には葦簀を設置して日よけとしていることなども観察している。

福屋の見所として有名な庭について、充真院は「庭はあまり広からず」と極めてそっけない。充真院は江戸の広い大名屋敷で生活していたので、福屋の庭は広く感じないのである。とはいえ、庭の記述はさらに続き、「山



図5 福屋

有て、其下にはなれや有やう子にて、隣座敷も広々思ふやう成屋根みゆる」と、庭に山があり離れもあること、広い座敷がありそうな屋根が見えると書き留めている。この福屋の庭や建物について、充真院は挿絵(図5)

を描いた。挿絵には庭を取り囲む建物や、庭の離れと山々、その他に木々や飛び石などが描かれている。¹⁶⁾

なお、充真院らが休憩をしていた隣の座敷に、先ほど新清水寺で見かけた娘たちが酒盛りをしながら休憩していた。この界限の寺社参詣の際に福屋で休憩をとるのが定番だったのでろう。充真院一行は店の赤前垂れ——接待女——に四天王寺を節に読み込んだ大坂の拳を見せてもらった。赤前垂れが披露した大坂の拳は、「天王寺の蓮池にかめがこうほす、はせたへていんとうかねこんとつきやアおとやんのしやん」と唄いながら拳をするのであった。¹⁷⁾まさに次の参詣地として充真院一行が向かう四天王寺を詠み込んだ唄であり、印象深かったことであろう。充真院側は赤前垂れたちに御礼として江戸の拳を披露した。身分の違いを越えて、一緒に賑やかに笑い合い楽しんだのである。¹⁸⁾

その後、赤前垂れが控えている部屋を見せてもらってから、店の女房らしき者ときちんとした身繕いの女性らに玄関で見送りをうけて福屋をあとにした。

(1) 新清水寺については『撰津名所図会大成』其ノ一、三五九〜三六〇頁や、『撰津名所図会』第一巻、二五四〜二六頁に記載がある。

(2) 明大翻刻本、四一頁。以下、新清水寺に関する引用は全て同頁である。なお、新清水寺から次の参詣地に向かう道すがらの様子の引用も同頁である。

(3) 滝については『撰津名所図会大成』の三五九頁によると、本堂の異——南東——に位置し、「近來多力の寄進により成就する所なり」とある。

(4) 当時、本堂があった場所は現在、墓地になっている。滝の流れも現在はささやかな水量である。

(5) 明大翻刻本、四一頁。以下、一心寺に関する引用は特記なき限り同頁である。一心寺については『撰津名所図会大成』其ノ一、三六八〜三七四頁に記載がある。

(6) 当時の正門とは現在の北門のことであり、現在、参拝者はほとんど通行していない。現在の正門は敷地の北東にある。

(7) 駒繫松については、『撰津名所図会大成』其ノ一、三六八頁に記述がある。一方、当時の正門から境内に向かう坂道に生えていた霜降りの松について、充真院は一言もふれていない。なお、霜降りの松は、現在上部が無くなりながらも、根元から芽生えた若木と共にかううじて残っている。

(8) 本多忠朝については、『新訂 寛政重修諸家譜』第十一卷（統群書類従完成会、昭和四十年）二三四〜三五頁に詳しい。徳川家康に近侍し、関ヶ原の戦いでは島津勢を

- 相手に活躍した勇者である。茶白山の戦いで奮戦したが戦死した。徳川家康は忠朝の兄である本多忠政を本陣に呼び寄せて、忠朝の死を悼んだという。
- (9) 註(8)と同書、二三五頁。
- (10) 充真院が内藤家のかつての当主について心を寄せていた件については、拙稿「関心と人物像(2)」の五三頁でふれた。大坂見物をする五日前の四月二十三日に政長の父である家長の墓を近江国の大練寺に立ち寄り参拝している。
- (11) 明大翻刻本、四二頁。
- (12) 本多氏と家臣の墓について、『撰津名所図会大成』其ノ一、三七〇〜一頁で「戦死古墳」として紹介されている。
- (13) 明大翻刻本、四二頁。茶白山については、『撰津名所図会大成』其ノ一、三七四頁、三七六頁に紹介されている。
- (14) 福屋については、『撰津名所図会大成』其ノ一、三七五頁に記載がある。これによると、福屋は一心寺の北の辺で、さらに四天王寺の石鳥居の西に位置すると説明がある。
- (15) 明大翻刻本、四二頁。以下、福屋の引用については特記なき場合は同頁である。なお、充真院が間取りに関心があることについては、柴桂子『近世おんな旅日記』〈歴史文化ライブラリー一三〉(吉川弘文館、平成七年)九一頁に指摘がある。
- (16) 明大翻刻本、四三頁。福屋の建物の外観を描いた絵と

しては、『撰津名所図会』第一巻、一九五頁の「安井天神山花見」の図に、安居天神社内の山から福屋がまじかに見える様子が描かれている。福屋は安居神社に隣接した南西に店を構えている。したがって、安居天神の山から福屋の北側を俯瞰図として描いたものである。充真院が描いた福屋の図は、建物に囲まれた庭の様子で、『撰津名所図会』には描かれていない箇所である。充真院の挿絵は、当時の福屋の庭の様子を知り得る貴重な一葉といえる。

(17) 明大翻刻本、四三頁。

(18) 充真院一行が赤前垂れたちと賑やかに楽しく拳を披露しあって過ごしたことは、拙稿「関心と人物像(2)」の二七頁でふれたので、本稿では簡略にふれるに留めた。

四 四天王寺と住吉大社

次に充真院一行が向ったのは四天王寺である。充真院は当寺を「天王寺」と記している。大寺院である四天王寺について、充真院は文章を多く記したうえ、挿絵(図6)を二つ(場面としては三ヶ所)描いている¹⁾。挿絵の一つは充真院らが入場した門と御堂や舞台と池、廻廊などの様子であり、もう一つは仁王門と五重塔や御堂――



図6 四天王寺

金堂——、さらに鐘楼堂とその向いの織殿があった廻廊などである。素描とはいえ、舞台の周辺の様子が的確に描かれ、仁王門と五重塔や金堂が、いわゆる四天王寺式伽藍配置で一直線に並んでいる様子を忠実に描いた。

充真院は「先大門を入て舞台有とは」と記しているの
で、一行は四天王寺の北西に位置する北門から境内に入っ
たのである。北門をくぐり充真院が第一に関心を寄せた
のは、石造りの舞台——石舞台——である。北門から舞
台までの間には食堂や西僧坊など寺院の僧侶らが生活す

る建物があり、舞台に行くにはここを通過するが、これら
らの建物について充真院は特にふれていない。唯一、北
門付近の様子を挿絵に描いた際に、御堂と記したものが
六時堂であるが、これについても特に説明していない。

充真院は舞台について「三間四方くらひにて、三尺く
らひ高き」とその形状を目測した。舞台は聖霊会など法
事の折に法楽を演じる為の設備であるが、充真院は形状
についてだけふれている。舞台の両側には池があり、石
造りの玉垣と石橋があった。この池を覗いた充真院は

「鯉・鮒・亀杯居て、くわし遣し候へは出てたへ申
候」と、さっそく鯉や鮒・亀などに菓子を与えて楽
しんだ。つい先ほど福屋の赤前垂れが唄った拳の歌
詞「天王寺の蓮池にかめがこうほす…」の亀である
と、同行者らと語り合ったことだろう。

さらに次の門をくぐると、「くわひろうつくり、
下小石敷て有」、すなわち廻廊をめぐるらせて、その
廻廊内の地面には小石を敷き詰めてある様子が目に
飛び込んできた。四天王寺の主要な伽藍が続く地点
に足を踏み入れたのである。門をさらにくぐると御

堂——金堂——があり、それを外から拝んだ。境内には様々な御堂があり、金堂のすぐ隣には五重塔があるが、充真院は立ち寄らず、廻廊内から出てすぐ南東に位置する太子堂に向かった。

太子堂では「横之上り段より上りて、御内しんにて拝し」と、建物にあがって内陣で参拝した。太子堂では珍しい物を見せられた。ちょうど退出しようとした際に、太子堂の堂守を勤める老人がやって来て、充真院らに「何かふたまたに成し古き竹を持来りて、是は其むかしさんかん征伐之時の御幡さをの由」と、二股の形状をした古い竹を持参して見せ、古代の三韓征伐の時に旗竿にした竹であると説明した。他の品も見せられたが、充真院はさほど関心を持たなかったらしく忘れていく。この古い竹の取り扱いと保存について、充真院は「江戸に此様成あらは、大切に金の袋にも入候はんに、こみたらけにてありし」と、江戸ならばこのような珍しい品は金——金欄——の袋に入れて大切にすることであろうが、当地では剥き出しのままでごみまみれであると、感想を漏らしている。

太子堂を囲む廻廊の中ほどに門があり、猫と牡丹の彫刻が施してあることに、充真院は目を留めた。これは廻廊の北側にある猫ノ門のことである。「其猫夜な〜ぬけ出との作物」と猫の彫刻が夜になると抜け出してどこかに行くという説明を聞いて、充真院は書き留めた。猫といえば、充真院はその生涯において晩年期に猫を飼っていた。その飼う猫が夜になるとどこかに出かけていくと、自らの手による雑記「色々見聞したる事を笑ひに書」に記している^⑤。猫好きである充真院だからこそ、四天王寺の境内を散策している際に猫の彫刻に目が留まり、関心を寄せて伝承を知り特記したのであろう。

猫ノ門を見た後、充真院らは「向之方へ行は、さつとしたる屋根にてせひ其所を行やうにして、其中に亀のせなかに水ふき出る有」と、猫ノ門から北に位置する亀井に移動した。この亀は「五六尺もあらんかの大きさ」と二m弱程の大きなものであった。亀は石造りであったはずだが、充真院はその旨はふれていない。この亀のある水場の様子について、「其水の中江心さしたる仏の号名を経木に印て水にてこすれば、くどくに成との事にて水

底に幾まいもしつみて有」と充真院は記している。亀井の傍らには阿弥陀三尊像と位牌が安置してあった。

充真院は、亀井の次に鐘楼を目にしている。鐘楼は亀井から西に位置している。当時、鐘楼に多くの人が登っていた様子を眺めている。鐘楼よりも充真院が関心を寄せたのは織殿である。織殿の位置について、「其向に有廻廊の中程に織殿有て錦をたらす」と、鐘楼の向いの廻廊の中程にあると充真院は記している。織殿については挿絵にも鐘楼の向かいの廻廊に位置する様子を描き、挿絵の説明文として「廻廊之内に織殿有て、かねつき堂の向也」と重ねて説明している。充真院は織殿がとりわけ気になったのである。充真院は織殿の内部を見物したく思い、御付に交渉してもらったところ、「織りよし見候様との事、うれしうて」と、織殿を見ることが了承されて喜んだ。うれしいと自分の気持ちを率直に表現しており、喜びがひとしお大きかった様子が伝わってくる。

しかし「行し所、二階にて織居由」と、廻廊の入り口に行くと織殿は二階にあった。充真院は「兼之目故、上りおりむつかしく」と、日頃から視力に支障があり階段

の上り下りに自信が無い為、織殿に登ることを断念せざるを得なかった。そこで「お光を初遣し、下にこしかけ持候うち」と、同行していた孫娘のお光に御付の初を伴わせて二階の織殿に登らせ、充真院は階下で腰掛けて待った。その後、先方から「織し錦をいろく見せ整候てもよくとの事ゆへ、五つ、六つ持かへりぬ」と、織殿で織った錦を階下で待つ充真院の所に運んで見せて、気に入った品を譲ると申し出があり、その好意を受けて五、六点を入手した。

以上が、充真院が特記した四天王寺内の事物である。それ以外については、「所々に御堂有れども、其節々にしるさゝれは忘れぬ」と、あちこちに建造物があったものの、見学中に記録しなかったのを忘れたとのことである。充真院が興味を寄せて特記した事物を振り返ると、四天王寺式伽藍配置の建造物の挿絵は描いたものの、これらについての説明や感想は無く、寺内の各所に配された荘厳な寺院建築や仏像に関する記述も無かった。むしろそれ以外の舞台や池の鯉や亀、猫の彫刻、大きな石造りの亀がある亀井、織殿や錦など、信仰そのものではな

くそれらに付随する事物に関心が向いていた。唯一、太子堂の内陣で参拝したが、全体としては珍しい事物を見聞することに興味が傾いていたといえよう。

四天王寺の次に、本日最後の参拝地である住吉大社に向かった。この日のこれまでの参拝地はいずれも近隣に位置していたが、住吉大社は唯一離れた地にある。四天王寺から一、六km程の距離を南に進むが、その間の様子について充真院は一言もふれておらず、住吉大社の門前に駕籠で到着してからの様子を記している。

住吉大社の門前で遅れている同行者が到着するのを待つ



図7 住吉大社の本殿

てから、御門から境内に入った。充真院は具体的に記していないが、北西に灯籠が林立する道があり、手水舎もあるのです、ここを通り手水舎でお清めをしてから、中ノ鳥居をくぐり、その後ろにある門から境内に入ったものと思われる。⁽⁷⁾

住吉大社について「住吉様は四社有由にて、まつ本社へ行」と、充真院は四社からなる社のうち、まず境内の奥にある本社、すなわち一ノ神殿に詣でた。充真院は本社の内上り、正式参拝をしたのである。さらに、本社の外観と内部の様子を、充真院は文章や挿絵(図7)で説明している。⁽⁸⁾ 充真院はその大きさを「三間計もあらんか」と目測し、内部の仕様について「なみの御宮とはちかひて惣板はりにてむなき有て白木作、上へ上りは直に板敷、奥のいんは向戸帳、両側にあま犬たしか向合有とおほゆ」と、内部が全て板張りであることや棟木が白木造りであることをはじめ、実際に神殿の内上がったからこそ知り得た見聞を記している。挿絵には、拜む場所を示して畳が敷いてあることを注記したり、御幣の位置や脇に小さな座敷がある事など、文章を補足する見聞を

描いた。詳しい観察から、充真院が本社の内部にとても興味をもったことが窺い知れる。

ちょうどこの日は公方様が参詣する卯の日であった為、充真院が参拝を終えて本社を退出する際に、大勢の見物人が本社の周囲に集まっていた。境内に大勢の人々がいる中を充真院一行は参詣を続けた。充真院は本社と同様に、他の社殿にも注目して観察している。「四社とも同じ作ながら、二社目は少し御宮ちいさき様に覚へ、跡は又ちいさくてわきの座敷は無かと覚ゆ、跡二社はならひ有と覚ゆ」と、それぞれの社殿を見較べている。建物の外観に充真院が関心を寄せて文章に表すことは珍しい。境内には他にも神輿舎や神楽所、鉾社、その他にも様々な建造物が数多くあるが、特記するほど関心は無く、南側の門をくぐり社殿のある区画から退出した。

門を出て目にしたのは、その両側に松並木が連なり、大小の石灯籠が林立する景観である。「両方松なみにて、石とうろう大小はあれともいくつとも数知れぬ程有て」と、石灯籠が実にたくさん建てられている様子を記している。石灯籠の並ぶ場所から「そり橋をわきに見へ、左

の方へ行高とうろう有」と、住吉大社の建造物の中でも名高い反橋と、敷地から離れた場所にある当社所縁の高燈籠を目にした。これは出見浜にそびえ立つ高燈籠である。^⑨

充真院は高燈籠を見に行くことを切望した。「奥絵にも書あれは夫を見度と思、浜江も参り度といへ」と、高燈籠がある浜まで行きたいと充真院は御付に言った。自らの希望を積極的に御付に表明するのは充真院としては稀である。しかしながら、「こゝよりは五町も有、夫江行は跡おそく成へしとてゆかず」と、住吉大社から高燈籠がある場所は五町（五四五m）も離れており、立寄ると帰りが遅くなるので断念せざるを得なかった。この一行の主人である充真院の希望であっても、御付の責任者が行程の都合を判断して、無理な場合は充真院に理由を伝えたくて我慢させたのである。この判断を下す御付は、御里附重役の大泉市右衛門明影であろう。

住吉大社の見所である反橋について、充真院は「そり橋は亀井戸のよりも少し大きくとは思ひつれと、廻りのけしきなく、少しの池にてむさく思ふ」と、かつて江戸

の亀戸天神で見た反橋を思い出して比較し、住吉大社の反橋はその周囲の景色に見るべき所が無く、小さな池があるだけでむさくるしいと、たいへん手厳しい感想を漏

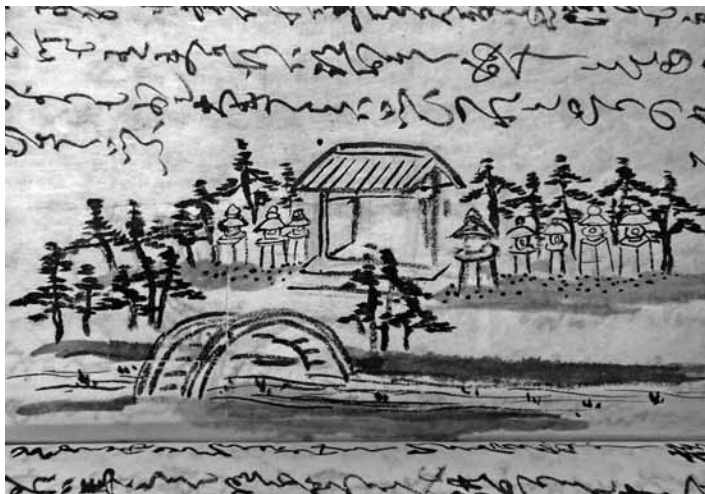


図8 住吉大社の反橋

らしている。これもまた、江戸風を最上とする充真院の傾向が表れた感想である。

充真院の審美眼に叶わなかったかのような反橋であるが、反橋を石灯籠と松並木と門を背景に挿絵(図8)を描いている¹⁰⁾。しかも、紙面のスペースを大きくとり、かつ丁寧を描いた堂々たる挿絵である。反橋は充真院にとって絵心を駆り立てる対象だったのである。反橋に対する充真院の辛口な感想は、その直前に高燈籠の見物を希望したが断念させられたため、不機嫌であったためかも知れない。

住吉大社をあとにして、休憩地として予定している難波屋に向かうため参道を進んだ。参道は石灯籠がたくさん並んでおり、その様子を「石とろうろは二・三丁もつゝきたちて有かと思ふを行て」と充真院は記している。通行する途中に住吉大社に向かう公方様の御成の行列がやってくることを知り、横道に逸れて駕籠の中から充真院は公方様を見た。「馬上にて随分りつは成供廻りにて、十人計もとをり申候」と御成の様子を観察した。日頃、充真院は通行の折に庶民から注目される立場であるが、片



図9 難波屋の笠松

や公方様の御成を知ると、礼を逸しないように気遣いながらも眺めずにはおられないのである。好奇心旺盛な充真院らしいひとこまである。

難波屋は庭一面に四方に笠のように広がる笠松が有名である⁽¹⁾。充真院は建物と笠松の様子を挿絵(図9)に描いた。四方に広がる枝を柄柱で支えている特徴ある形状を、充真院は簡素な筆致ながらも的確に描き留めている。

「奥の中二階より松見物して」とあるの
で、挿絵は奥の建物
の中二階から庭を見
下ろして眺めた様子
を描いたのであろう⁽²⁾。

難波屋では「皆は
やはくやう成物を
たへ候へとも、少し
きたなき様に見へし
かはたへすかへりぬ」
と、牡丹餅が少し不

衛生そうに見えたため充真院らは食べなかつた。難波屋を出てから、他の茶屋に立寄り食事とお酒を摂った。この茶屋で次の間に控えていた御付の砂野や初に茶屋の女房らと会話をさせて大坂の様子を尋ねさせたり、充真院が宴会が終わった後の座敷を見せてもらい、質素というより吝嗇というのが相応しい大坂人気質を目の当たりにした⁽³⁾。

茶屋を出てから日本橋に到着したのは六つ時(午後六時)を過ぎていた。船で内藤家の大坂屋敷の前に到着したのは、夜四つ半時(午後十一時)頃で、門前に家中の者が箱提灯を灯して出迎えてくれた。ようやく、一日がかりの寺社参詣の外出が終わったのである。

(1) これらの挿絵は全て明大翻刻本、四五頁。

(2) 明大翻刻本、四四頁。以下、四天王寺に関する引用は全て同頁。

(3) 棚橋利光著『四天王寺史料』(清文堂史料叢書・第六六巻、平成五年)に四天王寺法事記が収載しており、その一九三頁に法楽の際の舞台の挿絵がある。さらに、『摂津名所図会』第一巻の一七五〜六頁に舞台で聖霊会の法楽を催している様子が描かれている。舞台の説明に

ついでには同書の一七三頁にある。現在、石舞台は重要文化財に指定されている。

- (4) 猫ノ門は『撰津名所図会』第一巻の一五〇頁に掲載された四天王寺伽藍図でその位置が確認できる。この猫と牡丹の彫刻は現在もあるが、時を経てすっかり彩色が抜けてしまっている。彫刻そのものは、比較的平板な彫り具合である。

- (5) 充真院が「色々見聞したる事を笑ひに書」を作成している時期に猫を飼っていたこと、その飼ひ猫が夜に外出することなどについては拙稿「日向国延岡藩内藤充真院の好奇心——『色々見聞したる事を笑ひに書』を素材として——(1)」(『城西経済学会誌』第三四巻、平成二十年) 十八頁で紹介した。以下、当論文を注記する場合、拙稿「好奇心(1)」と略記する。

- (6) 亀井については、『撰津名所図会』第一巻の一八二頁や『四天王寺史料』の三一頁にある。現在は、亀の背中から水が出る仕掛けではない。供養したい人の戒名を札に記して水中に浸している。

- (7) 住吉大社を描いた図としては秋里籬島著『住吉名勝図会』(版本地誌大系18、臨川書店、平成十年)、二二〜七頁が詳しい。この図に描かれた様子を基にしながら、充真院が入場した経路を推測した。なお、住吉大社については『撰津名所図会大成』其之二(柳原書店、昭和五十一年)の二六〜五二頁で紹介されている。

- (8) 明大翻刻本、四六頁。以下の住吉大社に関する引用も、特記および当社を退出してからの参道に関する引用も、特記

なき限り同頁からである。

- (9) 反橋については『撰津名所図会大成』其之二三四頁と五一〜二頁に記述がある。反橋と高燈籠が当時の住吉大社の景物であったという。高燈籠については右同書の五三頁に記述がある。夜間に船が方角がわからなくなった際に、住吉大社に祈ると高燈籠が煌々と輝きを増すと云えがあった。『撰津名所図会』第一巻の六五頁には出見浜に築かれた高燈籠の姿が挿絵として描かれている。

- (10) 反橋と石灯籠や松並木などを描いた挿絵は、明大翻刻本の四七頁である。

- (11) 充真院が通行の際に人々から注目される立場であることについて、拙稿「関心と人物像(2)」の一〜四頁でふれた。

- (12) 難波屋の笠松については『撰津名所図会大成』其之二の五六頁と五八頁に記述がある。

- (13) 難波屋については明大翻刻本の四七頁に説明、四八頁に挿絵がある。

- (14) この茶屋で御付と店の女房が会話した様子については、拙稿「関心と人物像(2)」の二八頁でふれた。

五 二度目の大坂寺社参詣

後に充真院は、文久三年四月二十八日に訪れた寺社の

うち三箇所を、再び参詣する機会を得た。それは元治二年（一八六五）四月十五日で、充真院が延岡から江戸屋敷に転居する旅の途中で、大坂屋敷に再び滞在した時のことである。充真院はその様子を「海陸返り咲ことはの手拍子」に記している。二度目の大坂寺社参詣は、「天王寺辺見物に参る」^①というもので、四天王寺周辺の町を見物してから、高津宮と四天王寺、天満天神を訪れた。四天王寺を参詣した後に、天満天神に向かう途中で大坂城を眺めた。^②



図10 高津宮の工夫した石段

訪れた寺社の数は二年前に大坂の寺社を参詣した時よりも少なく半分である。さらに「海陸返り咲ことはの手拍子」には、屋敷から参詣地に至る経路を推察できる手がかりや、同行者に関する記載が無い。したがって、参詣地と休憩地の行動と

見聞を追えるだけであるが、以下に示しておこう。

久しぶりの高津宮は「御堂之内はしかと此前之事覚へぬ故、上りて拝さはやと思て」と、御堂——本殿——の内部の様子については先に参詣した時のことをはっきりと覚えていないので、今回は御堂に上り参拝した。^③実は以前訪れた折に、充真院は御堂の形状を見て江戸の仕様と異なると感想を持っており、その外観を目にしているものの、御堂には上がらず外から伏し拝んでいた。忘れたのではなく、そもそも御堂には上がっていないので記憶に無いのである。

充真院は上り段の仕様に心をひかれた。「内より上り段を出し付ると前の石にはさむと上の方切くみ有、ゑんにあふなく無様にすはりよく出来有」と、縁に安全の為に工夫を施している様子にたいへん感心し、挿絵（図10）も描いている。上り段の工夫に注目したのは、日頃から好奇心豊かで生活の知恵や工夫に広く関心を寄せる充真院だからこそといえよう。^④

本堂の内陣はあまり広くなく、充真院は二間四方と目測している。本堂は仁徳天皇を御祀りしており、ここで

数々のお供えと幣束を目にした。さらに、充真院は拝殿の脇にある神楽殿と金を張った襖や、その反対側の茶屋も目にした。しかし、この茶屋には立寄らなかつた。なお、「石之穴より御覽たるとの石、木之先に有」という記述があるが、何を指すのか不明である。見晴らしの地として著名な高津宮は境内の北西に遠眼鏡が備えてあり展望を楽しむことができるが、それについては充真院はふれていない。その後、参詣を終えて御門を出ている。

二回目の参詣は、前回の参詣では行わなかつた本殿での正式参拝を実現したり、以前の参詣の際に関心を寄せた事物とは異なる事柄について記している。二回目の高津宮参詣は、先の見聞を補う目的と視点で境内を散策したといえよう。

次の参詣地である四天王寺では、一ノ鳥居と西門を通って御門をくぐり、廻廊から五重塔を眺めた。一ノ鳥居とは境内の西側中程にある石鳥居のことであり、先の参拝とは異なる経路で境内に入ったことがわかる。御堂——金堂——に上って拝み、締め切りの格子を覗き阿弥陀仏が安置してある様子を確認している。五重塔にも上って

拜んでいたところ、僧侶たちがやってきて充真院らの額に御印を捺してくださるという幸運にも恵まれた。

先に訪れた際に参拝した太子堂は焼失して、仮御堂が建てられていた。「此前拜し色々縁起聞し事故、永くも成故、上り口外より拜し」と、かつて参拝した時に御堂に上がって拝み、縁起も聞いているので、今回は入り口の外から拜んだ。⁵⁾その他に「何様哉幾度も拜し候ければいくつ有しやわすれ候」と境内にある御堂をいくつも参拝したが、その数は忘れたという。他の御堂について、充真院は関心を寄せなかつたのである。「所々あるき見しなれば又わすれ候」と続いております、境内のあちこちを見て歩いた為に忘れてしまった。境内が広く様々な建造物があるので、いたしかたないといえよう。

一方、興味のある事物に関しては、充真院はしっかりと書き留めている。それは織殿である。織殿の位置については、「山門の向にて錦も見れ」と山門の向いにあると記している。以前訪れた際には、織殿は鐘樓の向いの廻廊内にあると文章と挿絵で書き留めていた。二年の間に織殿の場所が移転したようである。織殿は「此節は

あまり織不申とて、少々計あれともよきかたの切は無」と、近年はあまり錦を織っておらず、少しばかりあったものの充真院が良いと思う品はなかった。それでも「少々計整て」と少し分けてもらった。

その後、戻って御堂を拝んでから池で先に参拝した時と同様に「鯉・亀におくわしを遣し」と鯉と亀に御菓子と餌として与え、石橋を渡ってから東門に向かい退出した。⁶

二度目の四天王寺の参拝は時間の余裕があったようで、以前よりも丁寧に境内をめぐり、あちこちの御堂を数多く参拝できた。かつて参拝した御堂を訪れる際には参拝方法を簡略にした。前回は初めて訪れた四天王寺で珍しい事物に心奪われることが勝っていたが、二度目にはじっくりと拝むことを主にしたように見受けられる。先に訪れた際に目にとめた猫と牡丹の彫刻については二度目の参詣ではふれていないが、池の鯉や亀に餌を与えたり、織殿で錦を入手するなどの楽しみは二度目の参拝でも行なっている。

ゆとりのある参詣だったからであろう、四天王寺の境

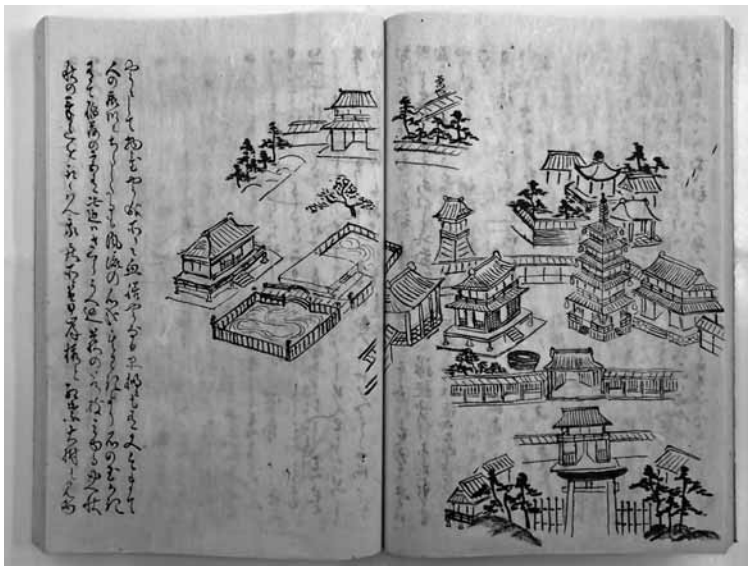


図 11 四天王寺境内

内の主要な建造物を描きこんだ境内図を旅日記の見開きに挿絵(図11)として描いた⁷。この挿絵は境内の西側か

ら俯瞰図として描き、立体感があるうえ、それぞれの建物の特徴を巧みにつかんだ見事な描きぶりである。描かれた建造物の配置の正確さは、充真院が二度目の参詣で、境内の配置を十分に理解したからこそ可能になったといえる。初回の参詣で配置の概観を把握し、さらに二回目に境内のあちこちを歩きまわったことにより、配置を正しく把握できたのである。

挿絵に描かれたのは、境内の西側にある西門と石鳥居、中央の廻廊とその内側にある仁王門・五重塔・金堂・講堂、南東にある太子堂とその周囲の建造物、さらに北側にある池と舞台・六時堂・東門などである。以前訪れた時にあっさりとした略図で描いた同じ対象を、より詳しく描き込んだのである。絵心のある充真院にとって、二度目の参詣で描いた挿絵はいわば完成図と言えるかもしれない⁽⁸⁾。この挿絵は二度目の四天王寺参詣の大きな収穫といえよう。充真院にとって、前回よりも納得が行く境内の挿絵を描きあげることが、再度の四天王寺参詣の目的だったのかもしれない。

四天王寺参詣を終えた充真院一行は、茶屋で食事をし

た後、八つ半（午後三時）頃に茶屋をあとにして、大坂城の外観を眺めている。「御城辺を見、江戸よりも御やぐら杯は多様に見へ」と、充真院は大坂城には江戸城よりも櫓が多くあるように感じている⁽⁹⁾。それから天満天神に参詣したが、「少々気分悪く見物に出しが其心もなくて帰り」と、充真院は体調不良となったため見物を断念して帰宅を余儀なくされた⁽¹⁰⁾。二度目の大坂寺社参詣はこうして終了したのである。

- (1) 明大翻刻本、一四三頁。
- (2) 大坂城と天満橋の挿絵は明大翻刻本、一四七頁である。
- (3) 二度目の高津宮参詣については明大翻刻本、一四三頁。以下、高津宮に関する引用、および挿絵は全て同頁である。
- (4) 充真院が好奇心豊かな人物であることについては、拙稿「好奇心(1)」と「同(2)」(『城西大学経済経営紀要』第二七卷、平成二十一年)でふれた。
- (5) 明大翻刻本、一四三頁。以下、二度目の四天王寺参詣に関する引用は、特記無き限り同頁である。
- (6) 明大翻刻本、一四五頁。
- (7) 明大翻刻本、一四四～四五頁。
- (8) 充真院に絵心があることは、拙稿「日向国延岡藩内藤充真院の旅日記から見る関心と人物像——五十三次ね

むりの合の手」を素材として——(1)——〔城西大学経済経営紀要』第三〇巻、平成二十四年)の七、十四頁に、旅日記に記した数々の挿絵を説明しながらふれた。

- (9) 明大翻刻本、一四六頁。
(10) 同右。

おわりに

充真院の大坂寺社参詣の様子を再現しながら検討してきた。江戸時代の人々は信仰心が深く、充真院もその例に違わない。寺社を訪れた際に、伏し拝むというように礼を尽くした態度であり、さらに拜殿や御堂に上がって正式参拝も行なっている。

信仰が根底にあるものの、初めての大坂寺社参詣は、名所として名高い寺社を多く訪れることが目的であり、娯楽の要素が強かったように見受けられる。信仰に関わる建造物そのものに対する興味は、住吉大社以外ではさほど感じられない。また、本尊をはじめとする仏像に対しても、詳細な記述は見られない。唯一、新清水寺で本尊を模した楽焼の小さな像を入手したく思ったが、壊れ

では困ると思ひ案外とあっさりあきらめ、その代わりに御守御影を入手しており、執着は感じられない。

むしろ、充真院が寺社内の珍しい事物に心をひかれていた様子が多々窺がわれる。特に、四天王寺で池の鯉や亀に餌を与えたり、門に施した猫と牡丹の彫刻、亀の形の石など、生き物に関する事物に心を寄せて楽しんだ様子が見られた。四天王寺では織殿の内部を見物したく思い、その望みは自分の視力の支障からあきらめたものの、錦を分けてもらい持ち帰っている。さらに、住吉大社と所縁があるものの境内から離れた浜辺にある高燈籠を見に行くことを切望したように、参拝そのものとは異なる建造物に強く興味を示した。

また、一心寺や難波屋の松など、名木を見せることも楽しみであったようだ。新清水寺の滝や一心寺に隣接する茶臼山など、滝や山など自然の景観にも心を寄せていた。寺社参詣の間に立寄った茶屋では接待女や女将らと交流を楽しんだ。茶屋は疲れを癒しながらにぎやかなひとときをすごしたり、茶屋の人々から話を聞いて大坂人の氣質を知り、実感を得る恰好の場所でもあった。さらに、

茶屋では座敷を見物して、間取りをよく観察している。間取りは充真院の関心事の一つであり、大坂屋敷に到着する以前の道中で立寄った休憩地でも屋敷内の間取りを見せてもらい、度々間取り図を描いている。大坂滞在中も大坂屋敷の簡単な間取り図と住吉大社の一之神殿の間取り図を描いた。

充真院の初めての大阪寺社参詣は、信仰に直接関する参拝を欠かさず行いながら、初めての土地で珍しい事物に出会い、見聞することに楽しみを見出していたといえる。娯楽が少ない当時において、さらに自由に外出する機会が乏しい大名家の家族の一員として、寺社を訪れるということは珍しい事物を見聞できる貴重な機会であり、楽しみであった。

行程の都合や充真院自身の体調の面から希望を叶えられず、残念な思いも少々味わったが、大坂での寺社参詣は長旅の過程で気晴らしになった。未知の地で初めて目にする名高い数々の寺社とその事物は、充真院の知的関心・好奇心を十分に満たすことができたといえよう。

二度目の大阪寺社参詣は、以前訪れた地の中から充真

院の希望を聞いて選定したと思われる。実質的には高津宮と四天王寺のみでの参拝となったが、拜殿や御堂にあり丁寧な参拝した。四天王寺は拝んだ御堂が多すぎてその数を忘れたものの、前回よりもはるかに多くの御堂をめぐる様子が見ええる。そして、初回の参詣で描いたよりも見事な挿絵を完成させた。拝むこと以外にも、充真院は高津宮の上り段の工夫された仕様に感心したり、四天王寺の織殿で錦を入手することを期待していたりと、自らの関心事を楽しんでいる。二度目の参詣についての記載は、特に関心が深い事物以外は初回とあまり重複しない。前回を補足する視点で二度目の見聞を行い、「海陸返り咲ことはの手拍子」にしたためたように感じられる。

充真院にとって大阪寺社参詣は、神仏に対する信仰心に根ざしたものでありながら、好奇心を満たす楽しいひとときであり、娯楽の機会であった。同時に名所を實際に訪れて見聞する、貴重な知的体験の場でもあったのである。